
刀神語

見果てぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀神語

【Nコード】

N8826U

【作者名】

見果てぬ

【あらすじ】

かの奇策士とがめと虚刀流七代目当主鑓七花が四季崎紀記の作りし完成形変体刀十二本を蒐集する旅から四百年後
幕府は健在であり
虚刀流は『刀神』と呼ばれていた

歴史は再び繰り返し
また再び運命の道へと動き出す

第一話（前書き）

作者の妄想から生まれたぜ！

っただけ言っときます

西尾風にいうなら100%妄想で書きましたかな（笑）
っていうか文学じゃねーよ

第一話

時はかの虚刀流七代目当主と奇策士が四季崎紀記の完成形変体刀十二本を蒐集したときから約四百年たった今

虚刀流は四季崎の作った最強の刀として『刀神』と呼ばれていた。だが、鑢一族は鑢七花が最後の一人であり、子孫を残すことはなかった。

それが彼が所有者のことを引きずってなのかそれともまた別の理由があったのかことの真相は歴史の闇の中である

神というものは実際、信仰心で成り立っている。信仰心が強ければ強いほど、神は力をもつ。

ようするに、神は信仰心があれば生まれるのである。

鑢七花は、『刀神』として、信仰され、神と成っていた。

本人曰く、

「面倒だ……。ていうか、なんでまたおれなんだ？」

という七花らしい疑問を抱いていた。

理由は至って簡単で

彼が日本最強で四季崎の刀を集められるほどの強者だからである。

彼が刀を集められたのは、一部は奇策士とがめの奇策のおかげなのだが、人々の話では彼『一人』ということになっているのはまた別の話である

四季崎の一族（否定姫）の悲願が少しは叶ったのか、叶っていないのかはよくわからないが、少なくとも今は、幕府も健在であった。歴史は、少しは変えられたのである

ただ、幕府――日本が諸外国からの攻撃を受けたのは変わらず、

日本は鎖国をやめ、国を開いた。

攻撃を受けたのは今から三百年前であった

それを見て、七花は

「おお。否定姫がいつてたのはこれかー」

と、まあそれはそれはのんきなことを言いながら、戦いにこっそり参加していたのだった。

歴史は繰り返す

と、人は言う

それは悲劇であつたり喜劇であつたり、其々なのだが。

歴史は繰り返すのだ

ある日のことだつた

とがめは、父の親馬鹿度おかしなに呆れて、家出していた。

学校は問題ない。今は夏休みなのだ。

それがとがめの家出を後押ししながら、とがめはある神社の境内で

休んでいた。

「あつい・・・」

夏真っ盛り。やはり暑いものはあつい。さっきまでは心身滅却と頑張っていたが、それでもあつい
はつきりいつて熱中症が何かで倒れそうだった。

「なにやってんだ？」

「ひいつ！」

不意に声をかけられて驚いた

「い、いきなり声をかけてくるな。びつくりするであろうが」

「そうか。それは悪いことをしたな」

顔を見ると何を思っているか丸分かりだった。しゅん。としたのがよくわかる

それよりも・・・

この男。いったい何故こんな暑い日に、いや何故この時代に、十二単を二重にしたものを羽織り下に袴をはいているのだろう。まるで時代にあっていない。しかも腰に白髪の手をくくりつけている。

「・・・。おい」

「ん？なんだ。」

「いや・・・ここじゃ暑くないか？」

お前だけには言われたくない

でも、確かに日が上ってきてもう足の先まで日向が近づいている

「ああ。確かに。場所を移動せねばなるまい。もう昼だな・・・。
もつと涼しい場所へ行くことにする」

「そうか。それにしてもその白髪・・・」

「この髪が気になるのか？この髪は生まれつきでな。先祖にもいないそうなのだ。突然変異というものだ。特に気にする必要はない」
「そうなのか」

「そうなのだ」
じゃあな。と一言言つとわたしはそこから立ち上がり、そのままそこから去った。

それにしても、変な格好だった。
何が好きであのような格好をするのだろう。そう思いながらとがめは図書館へと向かった

男は考えていた
あの白髪。あの顔……。目のことも聞きたかったが、あれは……。
それに、喋り方もだ。

考えても無駄なことか。
また今度聞いてみよう
今唯一繋がりのあるあの一族に。

第一話（後書き）

あくまで気まぐれだから不定期こうしんで

第二話（前書き）

短いなー

作者が今ほしいものは文才とお金です
編集しました（10月7日）

第二話

とがめは今、図書館にいた

神社にいたあの男。ただそれが少し頭に残っていた。

時代にそぐわないあの格好。おまけに髪は長い。どこから見ても、いや誰が見ても必ず変と言うだろう。

まあ。それでも暇潰し。時間はたくさんあるのだ。少し時間が潰せるのならいい。

まずはあの神社から調べようか

と、言うことで私はあの神社が祀る祭神について調べていた。

どうやら、あの神社は刀神を祭神としているらしい。無人なのかと思っていたが、どうやらちゃんと人がいるようだ。

ただ、その人の名前がかなり知っているものでとがめとしては舌打ちをしたくなるものだった。

その一族の名を四季崎といった

まあ。理解出来なくもない。刀神は変体刀を祀っているのだ。

変体刀を作った一族がそこにのつていたところで別に不思議ではない。むしろ至極当然の極みである。

ただ、四季崎の名でとがめは反応したのだ。とがめの宿敵である女の名前でもあるからであつた。

まあそれはおいでしておくとして、刀神について調べると、

刀の神様。決して剣ではない。剣術はあるが。

信仰すると、剣術の腕が上がる・・・と思つたが、実は何も上がらない。上がるのは主に対する忠誠心だそうだ。

・・・。だから幕府が重宝するわけだ。
神話が・・・って刀集め・・・。

世の中英雄が神になれるのか。

まあどうでもいいが。

昔から続く汽口家では刀神は全く剣がつかえない神だそうだ。
・・・もう、それは神じゃないのではないだろうか・・・

と。あきれる内容ばかりだった

刀集めって何をしたんだ。といたくなる

まあ。わたしは戦闘には門外漢だ。

たとえ、鈍な流派を使っていようが、わたしには知る由もない。
汽口は知っていそうだが。

それでも、あの変な男には繋がらなかったが。

気が進まないがああ四季崎に聞いてみようか。

まったく、調べるのなるとことん調べないと気がすまない私のこの
性格には自分でも呆れるな・・・

変な男はのんきに昼寝をしているのは余談である。

第三話（前書き）

サブタイ考えるのが面倒なのでけしました（笑）
今考えると七花の名前が出てない

所々編集します

話は変わらないから大丈夫！

第三話

男は四季崎の誰かが来るのを待っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。来ないな・・・・・・・・。」

午後四時

いつもはこの時間に決まって来るのに。

今日は遅かった。まあ人それぞれ都合ってものがあるんだ。と、男は考えていた。ついさっきまでは

今の時刻は午後九時

さすがに遅い。二週間に一回来ればいいだけなのだ。何も無駄は言っていない。そもそも、向こうから勝手に言ってきたのである。

「不謝。私達は謝らない。が、まあ待っていてくれたことには礼を言おう」

と、不忍と書かれた奇妙な仮面をつけた男が現れた。

「あんたも、物好きだよな」

「お前にだけは言われたくない」

左右田右衛門左衛門

それがこの男の名前である。

「いや、だってあんた死んでるのにさ。またあの人につかえてるんだろ？」

「不違。たしかにそうだが少し違う。あの方は姫様の子孫だ。それ

に――」

「だからなんだよ」

「それに、あの方は姫様の生まれ変わりだ」

「はぁ……。一体どうしたらそんなことわかるんだよ。」

「わかるものはわかる。おまえも見たのではないか？あの奇策士の生まれ代わりを」

そういわれると、何も反論できない。

「おまえはそれを聞くためにここで待っていたのだろう？残念だが姫様は忙しい。姫様は現在学友の質問に付き合っているところだ。誰とは教えてくれなかったが」

「ふーん。で、あんたはおれの相手をしに来たんだな」

「不違。そうだ。」

「用事なくないか？おれ食物無くてもいけるし。というより何で来てるんだ？俺にはそれの方が疑問だ」

「用事はある。これを見ればわかる」

渡されたのは書類の入った紙袋。

中の紙には何か文字が書いてあった。

「……。面倒だ……。」

「そういうな。將軍家のどこぞのお姫様からの命令だ。」

將軍家は代わった。

幕府は健在だが、將軍家は代わったのである。

あまりにも世間を知らなさすぎる將軍たちに、戦国六大名の一つ、徹尾家が家鳴家を滅ぼしたのである。

男は將軍家に忠義の厚かった徹尾家がそのようなことをしてかなり驚いたのである。

紙には

『尾張第一高等学校

鑓七花の当校への入学を許可する』

と、書かれていた。

「おれもいい年で学校……」

「心配は要らない。姫様は生徒として学校にいるし、私は教師として
いる」

「そういう問題じゃないから」

「何が問題なのだ」

「はあ……」

七花は勉強が苦手である。

苦手なだけで決して馬鹿ではない。

馬鹿と思われがちだが、違うのである。言われれば解るのだ。
でも、それをはっきり言えば馬鹿である。

可哀想な部類だ

本人自覚しているのだからなんとも言えない

「そういえば平仮名が読めなかったのではないか？」

「いつのことを言ってるんだ。流石にもう読めるから。」

七花には時間は無限大。と言えるぐらいあった。暇なので文字ぐら
いは……。という気まぐれで読めるようになったのだ

「今考えたら俺ってまにわにのところの狂犬よりも長生きしてない
か？」

「おまえは生きているのか謎だ」

結論付けられた

謎って・・・思うだけで悲しい
ようするに生命なのか謎なのだ
そう考えると悲しくなってきた

「高位生命体。ということにしておこうか。」

高位生命体ってなんだ。と七花は思ったが気にしない
きつと右衛門左衛門なりの気遣いなのだ

「私は用が済んだのでこれで帰るとする。じゃあな」

今思うと右衛門左衛門って幽霊だよな。普通の人には見えないんじ
や・・・・・・・・。という疑問が七花の頭に残った

第四話（前書き）

かけないなー

ラストはおもいつくんだが
会話文にそう

第四話

とがめはとある女の家に来ていた

「おぬしに聞きたいことがある」

「あんたが来るのは珍しいわね。で、何を聞きたいのかしら？」

「おぬしの家が祀る祭神のことだ」

否定姫は驚いていた

『否定姫』というのは彼女の本名ではない。あくまでそう呼ばれているだけなのだ。いや、もしかしたら彼女自身が名乗っているのかもしれない。本当のところは誰もわからないのかも知れない。

否定姫は四季崎家の祀る祭神、刀神をおそらく家の誰よりも知っているだろう。『否定姫』という名はもしかしたらそうしたところから来ているのかもしれない。

事実、おそらく刀神と一番長く旅をしたのは四季崎家の先祖の否定姫なのである。

「刀神については教えられる限りのことでいい」

そう言われると、なんとも言えない。

刀神について話すことは幕府に許可を貰わなければいけない。

幕府が何を隠したいのか知らないが、刀神については否定姫の独断で話すことはできないのだ。

「珍しく来てくれたのはまあ、嬉しくないわけではないけれど、話すことはできないわ。」

「そうか」

意外に諦めがよかった。これは私としても驚きだ。今日は驚きの連発なんじゃないかしら。

「邪魔してすまなかったな。じゃあな」

何か良いことでもあったようね

珍しく機嫌がいいじゃない

まあ知ったこっちゃないけれど

「はあ……」

ため息が似合う女だった。

七花とはまったく真逆に見える

病弱そうな、不健康そうな、青白い、とも言える白い肌

顔は美人と言ったことができるくらい整っている

見た目は清楚だった

「入学手続きをしたけど、来てくれるかしら。せっかくとがめさんがいるんですもの。それに仕える従僕もいるといいでしょう。善は急げ。いえ、悪は急げ。かしら？」

とんでもなく悪い笑みである

悪女、という言葉がよく似合うこと間違いなしだ

否定姫やとがめよりも悪女として相応しいだろう

鑓七実、いや徹尾七実だろうか

いくら遠縁で血が繋がっているからってまさかここまで来るだなんて私は徹尾の名より鑓の方が落ち着くのだけど。

七花のいた『鑓家』は七花で終わっているはずなのに何故また鑓家があるか。

簡単である。分家的なものだ。虚刀流が使えなくなつて鑓家は鑓家である

家名ぐらいいは残っている

要するに、一応七花と血の繋がりはあるわけである

本家はないが分家があるのだ

七実は、七花のことを知っている

自分が、七花の姉と瓜二つな容姿であることは知らないが

「そうだ。明日会いに行ってみましようか。」

七実知らないが、七花からすればこないでくれと言われるぐらい、

七花は七実が来ることを歓迎していない。

来ると悲惨なことになる

七花はなぜか背筋が寒くなるのと、嫌な予感を感じていた

第五話

七花は神と言われるものとなって、神らしい力を得たと言われれば得たと言える。だが、それはあまりにも彼にとって、苦痛の種となるものであった。

歴史を変える能力

刀剣を生み出す能力

彼は四季崎紀記が作りし完了形変体刀、虚刀『鑢』

完了たる彼は歴史の改竄をするために作られた存在とも言えるだろう。彼の所有者は、歴史の改竄に巻き込まれたもの、歴史の改竄によって生まれたものと言える

“この能力があれば、とがめを救うことができる。あの血道を辿らずに平和に暮らすことができる？”

幾度となくそれをおもい、彼は実行に移そうとした。だが、彼は所有者の最期を思いだし、これは、今おれがしようとしていることは本当にとがめのためなのだろうか。と、思い止まってしまう

そうしてきて、いくつもの年月がたち、今に至る

（おれは、一体何をしたいんだろう）

密かに思ったその疑問は、突然の来訪者によって、かきけされる

幽霊というものは思念である

魂があるものは人が見ることができたりするものだが、魂がないものは不可能だ。たとえ、神とよばれる存在であっても

「お久しぶりですね。刀神さん。いえ、鑢七花さんですか」

「！なんだ吃驚した。」

「あまり驚いたように見えませんね」

突然の来訪に驚くも、彼には元々あまり表情がないのでそこまでおどろたいた風には見えなかったらしい

（最悪だな・・・。）

「酷いですね。私って来るだけで最悪なのですか」

「あんたって読心術つかえるのかよ。まったく、どこかの誰かさんと一緒に人外だな」

「酷いですね。わたしはちゃんと人ですよ。」

そんな他愛もない会話をもうすでに人ではないものが見ていた。

「七実にそっくりだな。わたしにそっくりな者もいたし、この世界の理は輪廻転生なのか。あ、輪廻って単語だけで少し嫌なやつを思い出したぞ。全く。七花のやつめ、私以外の女にほいほいついていつてみる。呪い殺してやる。」

はたからみればかなり恐ろしいことを一人でごちているが、見えな
いことをわかっているのか声に出して呟く一人の幽霊がいた。

「なんか今懐かしいけどちょっとやばい視線を感じた気がするぜ」

「何よくわからないことをいつてるんですか。相変わらず変人ですね」

「生憎もう人じゃないよ」

「そうですね。じゃあ訂正して、変神。ということにしておきます。もう変じゃなくて、狂神でもいいですね」

「おれは神になる前から狂ってたよ」

一歩間違えるととても危ないことを話していた。七花はまだ狂っている自覚があるだけましなのだろう。だって、目の前にいる女は狂っている自覚のない、天災を止めるための枷もない途方もなく狂っているのだから

「学校。いつてくれますよね？」

「面倒くさいけど、時間は無限にあるしな。暇だから行くことにしたよ。」

「そうですね。そう言えば飛騨家って知ってますか？」

「知ってるけど何？」

「いえ、四百年ほど前にあった、大乱について、聞きたいのですが。」

「残念だけど、おれその頃のことよく覚えてない」

「飛騨鷹比等の一人娘のこと。であつてもですか？」

「なにが聞きたいんだ。その前にそれを聞く理由を言ってくれ。」

「理由はお話出来ません。」

「わかつた。ならはなさない」

「なに？私のことが知りたいのか。変人だな。七実もどきめ」

「私もなんだかとっても失礼な視線を感じました」

「あつそう」

「機嫌が悪そうなので私はこれでおいとましますね」

女は風のように去っていった

第五話（後書き）

何人かは幽霊で出てきます

第六話

何時だっただろう

四季崎の末裔たちは、先祖返りでもしたのだろうか
ある子供が突然未来を予言したり、人ならざるモノが見えたりと本来、もうなき力に目覚めたことは

四季崎の力の復活である

否定姫は考えた

七花くんが、もしも刀神ということがばれたなら、と
念のため、ということだが七花に話をしに行くことにしよう

「七花くん、ちょっと話があるんだけどー」

・
・
・
・
・
・

無視である

「ちょっとーっ！聞してるのー？」

のそのそと面倒という言葉の権化が現れた
「・・・・・・・・・・・・・・・・何？」

とても眠たいといわんばかりに布団を被っている

そして後ろには……

「英語の勉強してたの!？」

「いやだつて高校だろ? 英語出来なきゃ……」

「ぷっ……」

吹いた。笑いをこらえているのがわかる

「七花くん別に勉強しなくてもいいじゃない」

「え?」

「七花くんのいく学校は所謂一発芸学校。ようするに何か一つ飛び出た才能があればいいのよ?」

「え?」

「だから別に勉強しなくても大丈夫なのよ」

七花は硬直する

「おれの苦勞が水の泡に……水の泡にはならないわよ」……そうなのか?」

ぱーっと明るくなる

分かりやすいの代名詞になりそうだ

「学校では知と武に習う分野が別れてるわ。組は一緒だけどね。」

「ふーん」

「ただひとつ。武つて剣術や拳法のことなのよ。虚刀流を使うのなら別だけど……」

「何?」

「使うとねえ、七花くんが刀神だということがばれちゃうのよね」

「じゃねえよ。ばれると色々困るな」

「そーなのよ。だからあたしはそれをいいに來たのよ。」

「でも使えないと困るな……」

「だからひとつ提案するわ。七花くん能力を使つて鑓……いえ徹尾七実に弟がいることにしなさい。そして、それを七花くんということにしなさい。」

そうすれば神宿しとかまあいろいろ楽になるわ」

「いつてる意味があんまりよくわからんのだが・・・」

「単純よ。七実さんの弟になるのよ」

「そういうことか。歴史をかえて、それで弟がいたことにすればいいのか」

「そうそう「何を勝手に私の居ないところで話を進めているのですか？」・・・!」

「まあいいですよ。いえ、悪いのかしら？まあいいわ。どちらでも悪いわ。そのくらいなら刀神の力なしでもできます。私に弟がいたことにすればよいのですね？確かに合理的です。いいでしょう。では早速手続きをしてきますね。」

少女は風のように去って行った

「なんだったんだ。」

「相変わらず神出鬼没ね」

・・・・・・

「まあ。私は用事がすんだから帰るわね。」

静寂が訪れたころ

「あの引きこもり女にそっくりな女は引きこもりじゃないのか？」
という疑問が出来た幽霊がいた

第七話

おれが、最後に笑ったのはいつだっただろうか。
とがめが死んでから、感情がまた、欠落してきている気がする。
そういえば、とがめも最初の頃は怒ってばかりだったつけ。

「虚刀流。起きろ。」

「・・・んあ？」

目を擦ると、右衛門左衛門がみえる
あれ？おれ、いつのまに寝てた？
最近、寝る時間が増えたな。

「虚刀流。学校が始まる。いつまで寝ているつもりだ。」

「右衛門左衛門は起こしに来たのか？」

「不違。姫様の命令だ」

「そつか。ありがと。」

起きると、体が少し怠い。

なんか最近調子悪いな

健康だけがとりえだったのに

「私も忙しい。制服は其処だ。おまえは制服をきちんと着れるかどうか謎だからな。其処に着方の紙もおいてある。」

「わかった。」

「じゃあな」

紙に書いてある通りに着る

ていうか、特注って書いてあるよ・・・

昔も、服自体はあんまり好きじゃなかったからな。

んど。ベルト？を絞めて、と

よし。出来た。

ネクタイ？・・・わからん。もういいや。

七花は知らないが、七花の着方はどこから見ても・・・いや少し不良に見える。

よし、行こう・・・って鞆だ。

中身詰めて・・・

面倒だ・・・。

「朝だな・・・」

んん・・・っと

伸びると、制服を着て、準備をする

家出は、図書館を出たところで父に見つかった

走って逃げようとしたが、私は体力が無いので追い付かれ、捕まった

そういえば行き道の途中にあの神社があつたな。
時間にも余裕がある。少しよってみる
とするか。

神社の本殿から出る

行くの面倒だな。

怠いな

と、なんでおれ、こんなことばかり考えてるんだ。

とがめのそっくりさんにも会えるかもしれないじゃないか。

なんかそう考えると、気持ちの持ちようが変わるな。

神社の裏口からだと、お賽銭を入れている人がいる。

？

なんでお札？いや、そこは五円玉だろ。

まあ、おれの小遣いになるからいいんだけどさ

気付かれないようにゆつくりと、って

あれ？なんかこっちをすげー勢いで見てるような。気のせいだ・・・
よな？

選択肢

一、逃げる

二、近づく

三、無視して歩く

よし、三番だ。それがいい。
おれは無視して歩いた

あれ？あの人の髪、白くなかったか？

第八話（前書き）

作者はしちりんがこよなく好きだ

常に頭の中はしちりんであふれかたっている。

気を抜けば、ニヤニヤしているらしい。

そんな訳で皆様に質問だ。

世の中の刀オタの中で七とがファンは少ないのか！？

それと、何ファンがいるか、作者は物凄く知りたい

友人はひめさゆとかが好きらしい。

第八話

生徒会室

誰もが思っ、学園ものには必ずといっててもよいほど出てくる組織の部屋

七花はいま、そこにいた

七花は神社から出たあと、七実によって拉致された。

正確には、人目が無いところ、即ち七実ような人の許可がないと入れない生徒会室に誰にも見つからないようにと、車に乗せて送るようにしたのだ。

「で、用はなに？」

「身長を変えてください。あなたの能力ならできるでしょう？流石にあなたの身長は規格外です」

「ことわる」

「教室に入る度に頭をぶつけますよ？」

「いやいや。それ以前の問題だろ。制服の大きさがまず合わないだろう？」

「特注品です。あなたが能力を使って姿を変える度にその姿に合わせた形、大きさに変わります」

「何その無駄な設定・・・。」

「あなたが女に姿を変えたら自動的にズボンはスカートに変わります。素晴らしいでしょう？」

「・・・・・・。」

「あと、そうですね、顔の傷を消してください。厨二病と言われます。仮にも私の弟として、学校生活をしていただくのです。私はそ

んな厨二病な弟はいりません。」

「何その自己中心的な考え……。世界はあんた中心に回ってるってか？」

「その通りです。あと、私のことはお姉様と呼びなさい」

「だが断る！」

「あなたに拒否権はない」

「……。……。姉ちゃん」

「仕方ないですね。それで我慢しましょう。ついでにあなたは私の父の隠し子で政治的な関わりを持ちたくない。ということでも今まで存在を隠していて今は刀神神社の神主をしている少し趣味が変わっている人。ついでに刀神の神宿しという設定です。よろしいですね？」

「……。神宿しってなに？」

「神宿しとは大きく二つあり、ひとつはその才能が溢れる者のことを指す場合と、もうひとつは神の才能の一つを持つものことです。後者はごくわずか。というより、百年に一度ぐらいの

割合で産まれます。あなたは後者ほうの神宿しということにします。

「ふうん。でその才能は？」

「虚刀流が使えること。おまけとして、刀をもつと弱体化する。という才能もつけてあります。」

「後者は弱みじゃねえか」

「そうですね。でもこれで剣術の才能がなくても怪しまれませんよ。

「そうですね」（棒読み）

仕方がないので身長は190cmほどにしておく。正確には、自分が十六歳のときの容姿にしておく。身長もバッチリだ・・・たぶん二学期からの転入生。ということで七花の転入するクラスはそわそわしていた。

ちなみに学科は武術科一年零組
通称化物の集まりである

とがめなら、学術科三年零組であり、否定姫もとがめと同じ。という具合だろう

担任と呼ばれ、教室に入る

「転入生だ。自己紹介をしてやれ」

そついわれる。言われたのだからするが、何だかこの先生酒臭い。よく見れば敦賀迷彩にそっくりだ。

「おれの名前はやしゅり七花だ。」

噛んじやった・・・

第九話

「おれの名前はやしゅり七花だ。」

「噛んじやった・・・」

「えっと。鑢七花です」

「まっ。まあ・・・。とにかく席に着け。あの窓側の一番後ろの席だ。」

「やっちゃったよ・・・」

「なんでおれ、いつも大事なところで噛むんだよ・・・」

「鑢は武術科だ。刀神の神宿しで、剣術の才能がない。という能力だ。」

「先生。ひとつ抜けてます。おれ、虚刀流が使えます」

「すまない。でないと君がこのクラスにいる意味がないからな」

「先生。質問です。虚刀流ってなんですか」

「汽口、説明してやれ」

「はい。虚刀流というのは、自らの身体を一本の刀と例え手刀と足刀を扱う流派です。」

「その通りだ」

「じゃ先生。刀神ってなんですかー？」

「お前は脳筋か。また汽口、説明してやれ」

「はあ。刀神は四季崎記紀が作りし完成形変体刀十二本を集めた英雄で、日本最強を手にした者です。先生。もう少し詳しく話したほうがいいですか？」

「それくらいでいいだろう。蝙蝠、おまえはしっかり勉強しろ。」

「うっ・・・」

「蝙蝠ドンマイ」

「川瀬助けるよ！」

「嫌に決まってんじゃない」

「それくらいにしておきな。鑓が困っているじゃないか」

「先生。鑓ってことは七実さんの身内ですか？」

「その通り。弟だ」

「気にしないでいいよ。政には興味ないし、まつりごともともと跡も継がないし。実質徹尾家との関わりなんてないし、それに」

「それに？」

蝙蝠が問う

「おれ、刀神神社の神主やってるから」

「「そっそうなんだ・・・」」

神主で跡継ぎってやめれるのか？という疑問を懷いた者達が七花の発言で出来た

七花は今、部活の勧誘に追われていた

「陸上部はいいぞ！君のその筋肉をいかさないか！？」

「剣道部はどうだ！！」

「水泳部もいいぞ！」

「いや。おれ部活するきないから！」

（もうちよつとしたら生徒会室だ。そうすれば）

「ああっ！生徒会室に逃げた！」

「さすがに俺たちあの部屋に入る勇氣はねえぞ！」

「くそっ！逃がしたっ！せっかくの大物だったのに！」

「七実。外が騒がしいが何事だ？」

「おそらく、転入生の部活の勧誘かと」

「そうか「助けてくれ！」はい？」

「静かに入ってくれないかしら七花。」

「ごめん・・・。」

「七実。知り合いか？」

「弟です」

「七実に弟・・・」

「えっと」

「ああすまない。私は飛驒とがめだ。生徒会長をしている」

「おれは、鑢七花だ。」

「七花。私とそなた。どこかであつたことはないか？たとえば神社とか」

「えっと。おれ刀神神社で神主してるからその時にでも会つたんじゃないかな」

「そうか。そうだそなた生徒会に入らぬか？」

「え？おれ何にも出来ないし、どこにも所属するつもりもないから生徒会に入れば部活の勧誘に追われなくてすむぞ？」

「とがめさん。はつきり言つてしまえばいいのでは？」

「そうだな。人不足だ。」

「え？」

「そうなのだ。人不足でな？雑務などの仕事が溜まってきておるのだ。」

「そ・・・そうなんだ」

「うむ」

「でも、おれはどこにも所属するつもりはないよ」

「ふふふふふ。」

「と・・・とがめさん？」

「この私が予想しなかったと思うか？そなたのその答えをこの私が、幾度となく断られ続けたこの私が予想しなかったとおもつか？」

「なんかあんのかよ」

おもわず不機嫌になる七花

「愛だ！」

「あ、あい？」

「愛で動く人間はよく働く！」

（あんたの人間性がよくわかった気がする）
と七花は思う

「鑢七花！私に惚れていいぞ！」

第九話（後書き）

やっぱりあの奇策は恥ずかしいと思います

第十話（前書き）

次回更新かなり遅れます。

第十話

「わたしに惚れていいぞ」

何時の時代も変わらない人はいるのだなと七花は思う

その言葉は、彼の最愛の人が口にし、また、彼の最後の所有者が口にした言葉であった

（まあ。暇なだけだな）

そうは思ってもやっぱりいきなりそんな言葉を言われると固まってしまう

ドーンと向こうのほうで何かが爆発した音がした

「なんでしょうか？」

と、七実が問う

「爆発だな。城の方から聞こえたが…」

とがめは嫌な予感がしていた

爆発は己の父が最も得意とする攻撃方法だ

もしや、と思ったが考えても仕方のないこと、とがめは思考を放棄した

「城の方からですね。見に行ってきます。」

「迷子にならないように気をつけるのだぞ」

七実は方向音痴だ。

何処にいても迷子になるのが少し痛い、それ以外は有能だと、まあ大人になれば七実の方が、立場が上か

何てつたつて、將軍家だ。

男の跡取りがいない以上、七実が跡を継ぐの
だろう否。この男が跡を継ぐの
だろうか

あまり頭が良さそうには見えないが

「おれも外にでてみるよ」

「そうか。」

行ってしまったか。

もしもの場合。私はどうすればよいのだろう。

約420年前に父と同じ名の男飛騨鷹比等が起こした大乱。

当時の幕府を転覆に仕掛けるほどのあの
大乱のようなことにも
しかなれば。

あれ以降の幕府は、徹尾家の反乱が起
こるまでは平和だったという。
まあ。あくまで一般的な。という
意味ではあるが

一説では。八代將軍が暗殺された
という話もあるのだ。

いまの徹尾家がおさめる幕府は、「刀
神の守護がある」と言い続け
ており、実際のその加護があるの
かはわたしには知る由もないの
だ。

話はそれだが、もしも、父が行
っていた場合わたしは一体どう
すべきなのだろうか

第十一話（前書き）

將軍の名前つろ覚え・・・
間違ってたと言ってください

第十一話

心配はしたものの、それは杞憂であつた
わたしには、腑に落ちないが。

結果として、爆発は火薬を保管している第五武器庫の中で摩擦による熱が発生し、爆発した。というものであつた。

それにしても明らか派手すぎる爆発であるような気もしなくはない
のだが・・・。

■ ■ ■

「何事もなく。よかつたですね」

「まったくだ。死者が出ていたら大変なことになっておつたぞ」
「でさあ・・・」

背の高い男が二人の少女に質問する。

「何でおれここにいるわけ？」

「しらん」

「同じく。」

背の高い男。鑢七花は何故か生徒会室にいた。

恐らくは、部活動誘から逃げるためだと思われる

「部活動誘うるさい・・・」

「なら生徒会に入ればよいではな」だから何処にも所属したくな
入れば楽だぞ！」

どうがんばってもおれを生徒会に入りたいようだこの人は・・・

「七花。入れば楽になるわよ」

「姉ちゃん・・・」

「で、どうだ。入らぬか？」

「考えておくよ」

「うむうむ」

なにやらうれしそうだ。やっぱりなんかこう・・・。

人の話を聞かないところがものすごくにているような・・・
気のせいかな？

■ ■ ■ ■ ■

歴史の時間。

眠いな。というより面倒だ・・・。と思いつつ聞いていると

「八代將軍家鳴匡綱は年による病死。と言うことになっているけれど、一部では暗殺ではないかという説も立てられている。実際、その時期にのちの幕府の二大鬼女と呼ばれるうちの一人、内部監察所総監督の否定姫が謀反の罪で幕府から追放、そしてその時期にあつたとされる刀集めも、もう一人の鬼女、軍所総監督奇策士が死亡したことにより、否定姫が終わらせたが実はその奇策士の死は否定姫が將軍と面会するためだったとも言われている。もう一つ言えば奇策士の従僕が乱心して暗殺。と言う説もあつた」

「あつた。と言うことは今はないのですか？」

汽口が尋ねる

「徹尾家がねじ伏せたのさ。それじゃまるでそのとおりです。と言っているようなものだが」

ほとんど正解。でも若干違うな。

七花はおもう。とがめの死は確かに否定姫の手によるものだが、それは俺の不注意で起こったことなんだと、

否定姫はすべき事をしただけにすぎない。と。

それにしても、学者って凄いな。

よくもそこまで考えれるもんだと、七花は感心する

「もう一つその暗殺説を疑わせるものがある。それは、英雄、今の刀神が幕府におわれていたという事実だ。英雄なら、まずおわれはしないだろう。それに、生死問わずで追われるなんてまずおかしいことだ。まあ。それでもさすが後に刀神とよばれるものだ。幕府は結局捕まえられなかったのだよ」

「でも、今の徹尾家は・・・」

「刀神の守護。確かではないがでもあり得ないことではない。実際、刀神と徹尾家には血縁関係があるはずだ」

「そうなんですか」

若干冷や冷やした。この冷や冷やは実に久しぶりだ。追われているときに鉄砲を向けられたときぐらいの冷や冷やだった。

それにしても、徹尾家はどうかやらおれを使って威信を保とうと考えているらしい。

どうでもいいけど。とおもう。

そんなことを考えているうちに、窓際でちょうどいい具合に日光に当たっていたのか。それともまた、単に暇だったただけなのか、七花は眠りにについていたのだった

第十二話（前書き）

話が進まない・・・。

あつ。でも次回は結構進めるつもりですよ！
そのための前ぶりもつけておきましたし！

第十二話

神社の境内を掃除する背の高く総髪でなおかつ体は筋肉質。

それでもつてこの時代にはそぐわない、異彩を放った服装をした男がいた。

鑓七花である。

七花は、境内を掃除しながら考えていた。

この時代は、平和だな。と

平和であるから当然。身を守る術など必要もない。

よつて、剣術などの、戦ごと、争いごとに向いたものは何時の日か、忘れ去られていくのだろう。

神は、信仰心で成り立つものだ。特におれは、刀の神だから、きつとそう遠くないうちに、消えてしまうかもしれない。

消えることはたいして怖いわけじゃあない。ただ。ただ。思い残すところが少し残っている程度のようなものだ。

でも。やっぱり、おれは……

■ ■ ■

「ううむ……」

とがめは、この山ほどある報告書に目を通していた。

そのなかに、ひとつ興味深いものがあつた。

四季崎紀記の変体刀のレプリカが、どうやら裏でまわっているようだ。

四季崎。もしかしたらあの女が関わっているのかもしれない。あくまで、そう思った程度の話だが。

注意を促す程度のようなものはしておいてもいいのかもしれない。

「七実。これをまとめて幕府に提出しておいてはくれぬか？」

「はい。わかりました」

「今日の仕事は終わりだ。わたしは帰るとしよう」

今日は迎えの車も用意はしていない。

せっかくの徒歩なのだ。どこか寄り道をしていくとしよう。

帰り道にはあの神社もあることだ。寄っていつてみるのも面白いかもしれない。

そう思うと、とがめはわくわくしていた。

小さな好奇心かもしれない。あやつに会えればもしかしたら神社の宝具などを見れるかもしれない。

面白そうだ。寄っていくとしよう。

とがめは少し駆け足で、神社へいくのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8826u/>

刀神語

2011年11月17日09時11分発行